

子どもを伸ばす4つの視点

日々の教育活動において、多面的な児童生徒理解に基づく子どもとの信頼関係を基盤に、次の4つの視点から生徒指導を意図的に行うことが、一人一人の成長を促します。

児童生徒理解 ↔ 信頼関係

子どもと教師との厚い信頼関係を築く基盤は、児童生徒理解です。子どもと積極的にかかわり、一人一人の子どもや学級集団の実態・状況を多面的に把握し、とりわけよさを理解することが、生徒指導の基本です。

全教職員がすべての子どもに関心を持ち、長所に目を向け、変化を見逃さず、日常的に情報を共有するシステムをつくるのが大切です。

目的意識

なりたい自分があり、取り組みたいことが明確な子どもは、今、何をすべきか考え、自律的に行動できます。明確な目的意識は、それに向かって挑戦するエネルギーとなります。また、それを達成することが成就感につながります。

達成度が明確な目標を子どもと共有し、その達成に向けて支援していくことが大切です。

自己決定

個人や集団の目標達成・課題解決において、根拠を基に適切に判断し、自己決定することが、子どもの主体性を高めます。また、責任感をもって取り組み、やり遂げた達成感を味わうことが、自立に向けた成長を促します。

子どもが事実を基に的確に状況をとらえ、自分の目標、集団に共有されている価値に照らして適切に判断できる状況を設定します。

個性・能力

自分の個性・能力が発揮されてこそ、学習や活動に主体的に取り組むことができます。集団の中で自分らしさを発揮できた子どもは自己存在感を味わい、集団の期待を受け、さらに力を発揮しようとしていきます。

子どもが自信をもって自己表出できる雰囲気を醸成するとともに、的確な児童生徒理解に基づき、一人一人に期待し、それぞれが生きる場面を意図的・計画的に設定していきます。

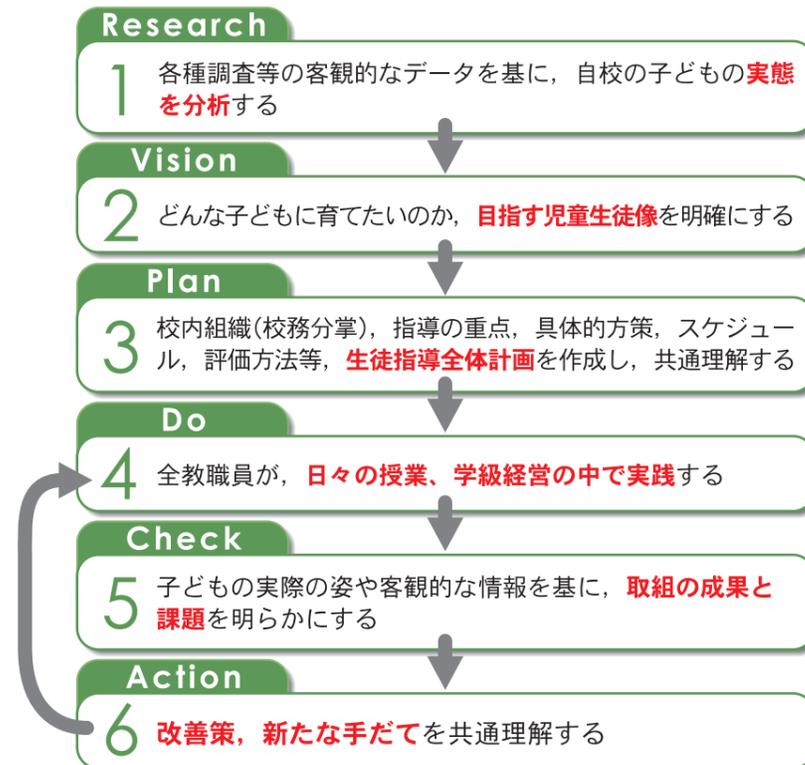
協同性

一人一人が大切にされる風土の中で切磋琢磨し合うことで、集団の成長とともに個々の社会性もはぐくまれていきます。他者の考えや言動から学び、互いに認め合い、支え合いながら力を合わせる事が大切です。苦楽を共にしながら課題を解決し、目標を達成することで、自分が高まり、集団がまとまり、絆も深まっていきます。

相互作用を通して学び合う協同活動、様々な人々とかかわったり交流したりする活動を計画的に位置付けます。

全校体制で取り組むポイント

校長のリーダーシップのもと、全教職員がアイデアを出し合い、自校の生徒指導の方針と具体的な方策を共通理解し、チーム一丸となって取り組むことが重要です。教職員が、**目標を明確にし、何ができるか考えて自主的に行動し、自分らしさを発揮し、同僚同士で高め合い**、日々情報交換しながら「風通しのよい教務室」をつくりましょう。



例【生徒指導、特別支援教育の窓口からも授業を語り合う】

A 小学校は、教科のねらい達成を目指す日々の授業の中で、様々な個性や特性をもった子ども同士がかかわり合って学びながら、「互いのよさを認め合う子ども」を目指したいと考えました。そこで、全員が取り組む研究授業の指導案に、生徒指導と特別支援教育を窓口にした手だてを必ず記述するようにしました。授業後の協議会で「互いのよさを認め合う」ための手だての有効性も協議しています。

例【目指す生徒像を明確にし全教職員で一丸となって取り組む】

B 中学校では、客観的な実態調査の結果から、自校の生徒に最も身に付けさせたい力を「他者と積極的にかかわる力」とし、全教育活動の中で「かかわり」「人間関係」に重点を置くことにしました。そこで、学校行事、生徒会活動、学級活動の年間計画に「望ましい集団活動」をPDC Aサイクルで位置付けました。また、全教職員が、「リーダー集団の育成」「合意形成のための話し合いのスキル」を常に意識し、日々の授業や教育活動に当たっています。

本紙は、日々の教育活動の中で、全教職員が全員の子どもの対象に、自校の生徒指導の方針を意識して取り組むことを願って作成しました。生徒指導の窓口から、日々の学級経営、授業、特別活動等で推進する取組の例を示したものです。「新潟市の授業づくり」リーフレットと併せてご活用ください。指導主事訪問、教育委員会主催の研修会の際にも活用しますので、ご準備ください。

新潟市の生徒指導

子ども一人一人の成長を促すために

新潟市は全教職員で次のような子どもを育てます

- ◇めあてをもち、自己決定し、自主的に行動する子ども
- ◇互いに認め合い、支え合い、高め合う子ども

